『最後まであきらめない』

人工呼吸器を装着してもう１８日が経過していた。家族の見守る中、Ｅさんの心臓はついに力つき、動きを止めた。２４歳という若さであった。傍らで父親に抱かれながらすすり泣く幼い息子さんの姿を見て、私もスタッフも涙を誘われた。悲しい別れであった。真冬の金沢は寒さが厳しかったが、この日は悲しみと重なり、いっそう身にしみた。

１９９４年春、Ｅさんは、２人目の子を身ごもり、妊娠 22 週という状況の中、急性リンパ性白血病を発症した。あまりにも突然の宣告に衝撃も大きかったというのに、説明を受けたＥさんは涙ひとつ浮かべず、覚悟めいた表情で治療に同意した。説明の後、さっそく化学療法が開始された。経過は順調に思えたが、治療４日目、大量の不正出血から緊急手術となり、残念ながらお腹の子供はうぶ声をあげることは無かった。悲しみに浸る間もなく、その後も治療は続けられた。治療の効果は一般の白血病に比べて極めて悪かった。

後日、Ｅさんの白血病細胞は中でも抗がん剤の効果が極めて悪いタイプであることが判明した。治療を開始して約３ヶ月後、完全寛解（あたかも治ったような状態）に入ったかに見えたが、残念ながらこの状態は長くは続かず、化学療法と白血病細胞の追っかけっこの状態が続いた。

もはや、治る可能性のある治療は骨髄移植しかないと思われた。しかし、残念なことに家族、骨髄バンクを含めて、６種類の白血球の型（HLA）が全て一致する提供者（ドナー）を見つけることができなかった。我々はあせったが、考えている猶予はそれ程無かった。そして、HLA が２つ不一致の母親をドナーとして骨髄移植を行うことを決めた。

当時は１つ不一致までの移植は積極的に行われていたが、２つ以上不一致の場合は、危険性が高いため、実施に踏み切る症例は少なかった。しかし、Ｅさんにはそれでもその治療に賭ける強い意志があった。まだ幼い息子（幼児）のために「何としても頑張る」と言い切った。

１０月、強力な抗がん剤の投与と大量の放射線照射による前処置の後、母親の骨髄はＥさんの体内に移植され、２０日目に生着が確認された。そして、次々と襲う合併症を克服し、移植後１３２日目（１９９５年春）にＥさんはようやく退院となった。白血病と診断されてから、約１年が経過していた。ここでハッピーエンドにして欲しい。誰もがそう思っていた。しかし、現実はとても厳しかった。約１ヶ月後の血液検査にて再発が判明したのである。

一度増え始めた白血病細胞の勢いは今まで以上に激しいものであった。予想通り、化学療法のみでは効果は一時的で、体力的にも厳しいと考えられた。我々は、次の戦略として、免疫反応による白血病細胞への攻撃治療を施すこととした。先に行われた骨髄移植のドナーである母親から、今度は血液を大量に採取し、その中からリンパ球という白血球だけを再度注入する方法である。うまくいけば、母親のリンパ球が白血病細胞を攻撃してくれる。既に、この治療に関しては国内外で評価されつつあった。

皆、Ｅさんを何としてでも救いたかった。我々は願いを込めて、計２回母親のリンパ球をＥさんの血管内に注入した。しかし、またしても皆の願いはかなわなかった。強い免疫反応を認めながら、確かに骨髄や血液の状態は完全寛解を維持したのだが、何と、今度は皮膚の下にしこりを作って白血病は再発したのである。もはや治療にも限界が感じられた。この時、私の説明を聞き、Ｅさんは何を感じていたのだろうか。

その後３ヶ月もの間、彼女は入院せずに外来での治療（化学療法・放射線照射）を受けるため、毎日病院を訪れた。体力的に厳しそうな彼女の姿を見て、何度と無く入院を勧めたが、彼女は「一日でもあの子のために家に居てあげたいんだ。」と話し、断った。

年が明けて１９９６年１月、ついに白血病細胞は骨髄や血液の中にも増え始め、同時に肺炎も併発し、彼女は力尽きたように自ら入院を希望した。２日後、早くも呼吸状態が厳しくなり、急場をしのぐには気管の中に管を入れて、人工呼吸器につなぐしかなかった。このような状況の中で人工呼吸器につなぐ場合、薬で眠らせる必要があり、そうなるともう目を開けて話ができなくなる。しかし、その間に治療が奏功すれば、機械をはずし、また話すことだってできる。家族も私たちスタッフも、彼女にはまだ回復して欲しかった。そしてＥさんも「苦しいのは嫌。」と言い、回復するというかすかな希望を持って、その治療法を選んだ。

それぞれの思いを秘め、皆で静かに彼女との別れの時を持った。最後に家族だけでの時間をつくり、彼女の「もういいです。」という言葉を受け、管を入れる処置を行った。そして、残念ながら冒頭のとおりに、彼女は２度と目覚めることはなかった。

最後まで自分の意思をしっかりと表現し、前向きな姿勢を崩さなかったＥさん。当時、同年代の女性が数名入院されていたが、その中では何ら変わりない少女のようなあどけなさを残した２０代の女性であったが、一方で妻として母親として、一日でも生きようとしたひたむきな姿がそこにあった。本当に早過ぎる別れではあったけど、家で過ごした最後の３ヶ月は夫婦にとっても親子にとっても、とても濃密な時間であったのだと思う。

そして、最後まであきらめずに頑張りぬいた母親の姿を見て、きっと息子さんは今、立派に逞しく成長していることと思う。

（平成 15 年 10 月 8 日　著）